広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	小学生の書写体の大きさと教科書活字号数
Author(s)	石本，栄
Citation	児童の言語生態研究 , 9 : 7 - 13
Issue Date	1978-06-08
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045098
Right	
Relation	

特集

「用具としての言語学習のあり方」

児童の言語生態合同調査研究・研究報告

小学生の書写体の大きさと教科書活字号数

石本　栄

目的

現行の教科書、市販されている小学生用ノートを開いてみても、大ざっぱに言って、低学年は大きな活字、大きなわくが、高学年は細かな活字、小さなわくが使用されている。教科書についてもう少し詳しく述べると、

一学年では、22ポイント
二学年では、20ポイント　20ポイント
三学年、四学年では、16ポイント　16ポイント
五学年では、14ポイント　14ポイント
六学年では、12ポイント　11ポイント
11ポイント　14ポイント
11ポイント

相当の活字が使用されている。（ポイントを以下何ポとする。）

低学年には大きな字、高学年になるに従って細かな字をとはどのような基準のもとに考えられたのであろうか。我々大人の常識で決められたものではなかろうか。しかし、現実に低学年の子供達にとって、現行の活字より細かな字を読んだり書いたりすることは、はたしてむずかしいのであろうか。以上のような教科書採用活字の号数に対する卒直な疑問もさることながら、本調査は、子供達の文字を書く、その大きさの決め方ならびにその指導の基準を考えたいとするところから出発したのである。

子供達は、思い思いの大きさの字を書き、中学年あたりから大体自分のふだんの文字の大きさを決めて来るように思われる。しかし、その書く文字の大きさを大体固定させ、更に高学年になるに及んでその目的と場合によって自由自在になるまでには、（はたして六年生までにそれができているかどうかはまだはっきりしていないが）かならず、書くためのいわゆる手の早さ、書くものについての習熟の度合（思考、記憶等）、その他を考え合わさなければならないだろう。それには一番見なれているであろう国語の教科書の字の大きさが同一の手本として共通の役割、あるいは何等かの影響を与えるものとして考えてよいのではないだろうか。もちろん、そんなことを直観的に、判断して教科書の活字の大きさを定めて来ていたにちがいない。本調査は、改めてその妥当性を検討してみようとしたのである。

まず教科書の活字の大きさで書写する際の所要時間を調べ、各学年の教科書採用活字の大きさと、相当学年の子供達の書写する際の文字の大きさとには関係があるかないかを調べようとした。

方法

現行の小学校教科書の活字は、22ポイント（活字の大きさを表す。以下何ポとする。）から11ポ相当が使用されている。本調査をするにあたり、31ポ、26ポ、22ポ、20ポ、16ポ、14ポの六つを採用した。14ポ以下については、調査上、わく組が細かくなり、児童にとってわくが気になりすぎると思われたので省略した。

調査は、31ポから14ポへ順に行うもの（№1）と、14ポから31ポへ順に行うもの（№2）と二通りあり、それぞれについて手本となる文を用意し（後に記す。）各ポイント毎に時間を記入させるようにした。（№1は、大きいわくから小さいわくへ、№2は、その逆である。）

調査事例の概説

○手順について

(一) わく組みの用紙を一セット配布。六枚に名前を記入させる。

(二) №1の手本となる文を配布。裏にしておく。

(三) 「始め」の合図で行い、最後の児童が終えたところで終了。各用紙毎にのべ六回行う。

(四) 実施後、六枚を一まとめに回収。

(五) (一)から(四)の手順で、№2を行う。

○指示について

(一) テストではないこと。

(二) 正しく、できるだけ早く書くこと。

(三) なるべく、わくからはみ出さないこと。

(四) 消しゴムは使わず、まちがえたら、その上から書くこと。

(五) 書き終えたら挙手をすること。先生の時間読みが始まったら、それ以後、挙手の必要がないこと。

(六) 時間読みを聞いて、所要時間を記入すること。（何秒か。）

(七) 一枚の用紙毎に一回ずつ終えること。（のべ12回行う）

○計時の方法について

(一) ストップウォッチを使用

(二) 最初の児童の挙手があってから、時間読みを始める。

例 30、31、32……（一秒刻み）

(三) 単位はすべて秒で。（一分以降も）

○実施日時と実施校

昭和五十二年十一月中

二年	東京・第一寺島小	30名
	東京・四谷第六小	37名
三年	秦野・広畑小	33名
	東京・四谷第六小	32名
四年	東京・南第四小	39名
	東京・南第四小	34名
五年	横浜・大正小	39名
五年	東京・玉川学園小	36名
六年	東京・町田第三小	35名
	東京・四谷第六小	37名
	計	352名

（一年生は調査の仕方について理解しがたいという判断から除いた。）

○手本とした文

二年

№1 ひろい　海の　どこかに、
小さなさかなの　きょうだい
たちが、たのしく　くらして
いた。

№2 むすめさんは、くるりと
まわれ右を　すると、また
地めんを　のぞいて　歩きだ
します。

三年

№1 しかし、しんぺい君は、本
当は、あの子牛が　売られて
いった先を、こっそりとさが
していたのです。

№2 はたらきありは、えものを
見つけると、道しるべとして、
地面にこのえきをつけながら
帰るのです。

四年

№1 船長は、これを見ると、ま
るで何かにのどをしめつけら
れたように、とつ然大きな声
でうめきだしました。

№2 松井さんは、その夏みかん
に白いぼうしをかぶせると、
とばないように、石でつばを
おさえました。

五年

№1 しばらくたってから、太一
は、一人で水がめを自転車に
積んで、えの海までもどして
行きました。

№2 弟はそんなことはないらし
く、カステラをいっぺんに食
べてしまい、まだほしそうな
顔をしている。

六年

№1 片耳の大シカは、ぐっと頭
を下げて、犬に向かって、そ
の大きな角をふり立てている
ようでありました。

№2 そして、ぼくは、なぜ村の
老人たちが教室のすみに来て
すわっているのかが、今にな
って分かりました。

調査結果と考察

調査結果を次の二つの観点から整理することにした。

一つは、各ポイントの平均時間を学年毎にまとめたもの。Aの表、B、Cのグラフがそれにあたる。もう一つは、ポイント間における所要時間の差の大小を一人一人について調べ、学年毎にまとめたもの。Dの表、Eのグラフがそれにあたる。以上二つの観点からの整理を、№1、№2それぞれについて行った。（№1、№2については「方法」の項を参照されたい。）

所要時間一覧表（単位 秒）

No. 1

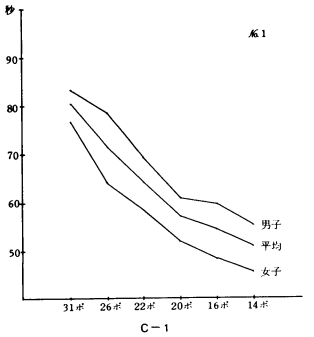
	31ポ	26ポ	22ポ	20ポ	16ポ	14ポ
2年順位	⑥	⑤	④	③	②	①
平均	80.25	71.70	64.39	57.12	54.52	50.88
男子	83.43	77.78	69.40	61.19	59.46	55.16
女子	76.33	64.20	58.00	52.10	48.43	45.60
3年順位	⑥	⑤	④	③	①	②
平均	107.41	86.97	81.52	71.42	66.64	68.37
男子	114.24	98.06	89.78	83.14	72.09	76.00
女子	99.91	73.21	71.28	63.59	60.07	58.90
4年順位	⑥	③	⑤	④	②	①
平均	121.59	76.80	85.11	76.92	72.11	70.85
男子	125.00	71.45	88.58	80.81	74.91	73.13
女子	118.93	80.59	82.02	73.88	69.93	69.07
5年順位	⑥	⑤	④	③	②	①
平均	65.11	55.43	54.13	50.20	48.11	46.81
男子	68.33	58.18	57.15	52.56	50.58	48.95
女子	61.51	52.29	50.69	47.57	45.28	44.37
6年順位	⑥	⑤	④	③	②	①
平均	58.70	52.36	51.46	49.60	47.51	47.13
男子	63.63	57.08	56.58	53.56	50.83	49.97
女子	53.92	47.64	47.66	45.64	44.19	44.28

No. 2

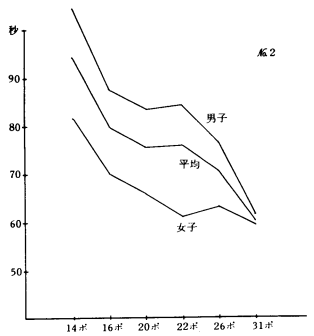
	14ポ	16ポ	20ポ	22ポ	26ポ	31ポ
2年順位	⑥	⑤	③	④	②	①
平均	94.26	79.69	75.61	75.75	70.50	59.97
男子	104.39	87.50	83.50	84.47	76.43	61.51
女子	81.69	70.00	65.83	61.31	63.34	59.11
3年順位	⑥	⑤	④	③	②	①
平均	91.20	77.88	71.15	70.55	67.83	65.11
男子	99.06	84.83	78.14	77.83	74.28	70.25
女子	81.45	69.24	62.48	61.52	59.83	58.72
4年順位	⑤	⑥	④	③	②	①
平均	63.57	67.77	57.52	56.81	54.48	53.10
男子	67.77	71.44	59.61	59.65	58.06	56.59
女子	60.39	64.90	55.90	54.66	51.68	50.37
5年順位	⑥	⑤	④	③	②	①
平均	52.61	45.55	42.38	41.92	41.54	39.07
男子	56.36	48.62	45.37	44.21	44.62	40.77
女子	48.43	42.14	39.14	39.43	38.11	37.17
6年順位	⑥	⑤	④	③	②	①
平均	58.72	52.43	49.63	48.07	45.83	45.53
男子	62.60	55.25	52.97	51.31	48.28	47.72
女子	54.94	49.61	46.28	44.92	43.39	43.33

A

2 年

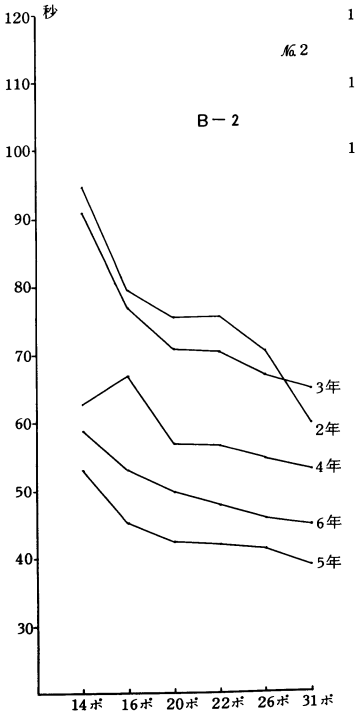


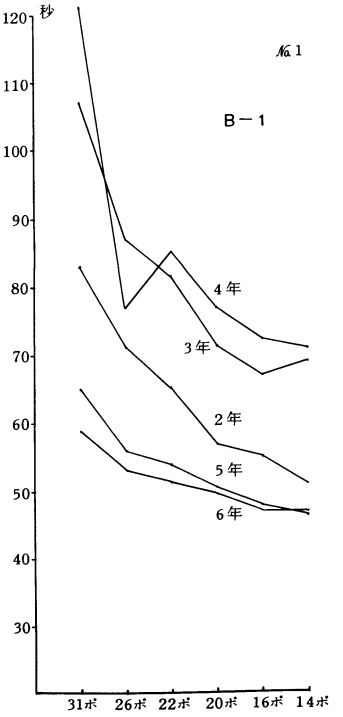
C－1



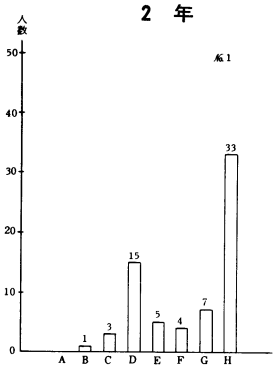
C－2

学年別平均時間

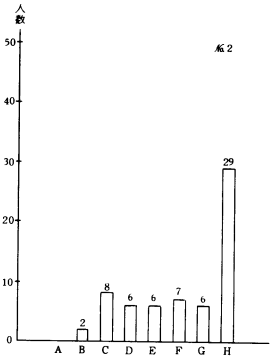




2 年

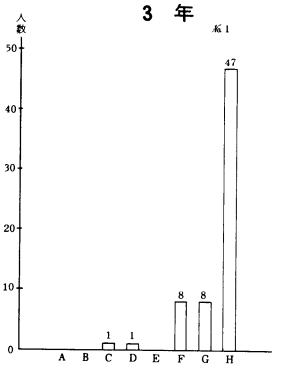


D－1

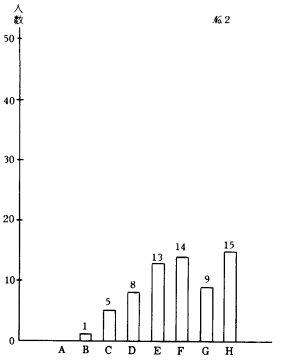


D－2

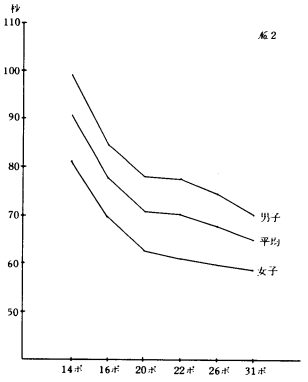
3 年



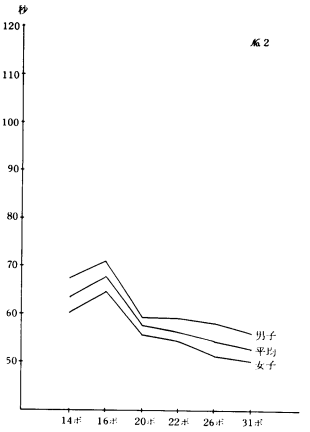
D－3



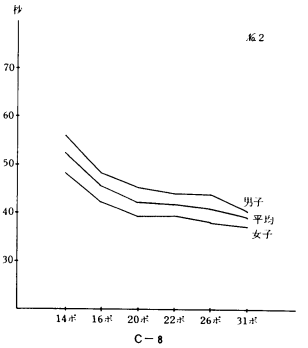
D－4



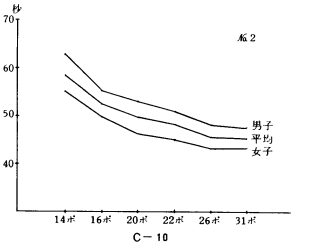
C－4



C－6

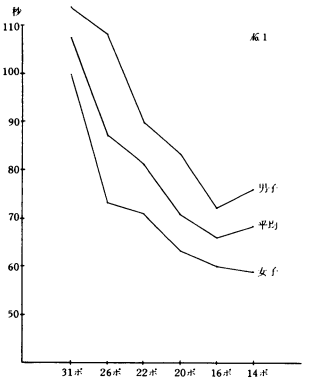


C－8



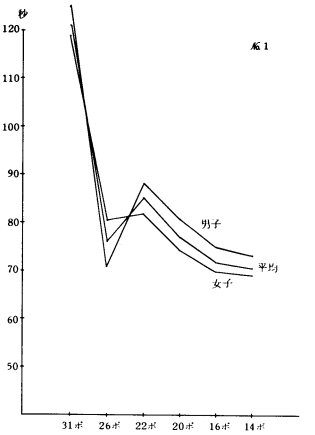
C－10

3 年



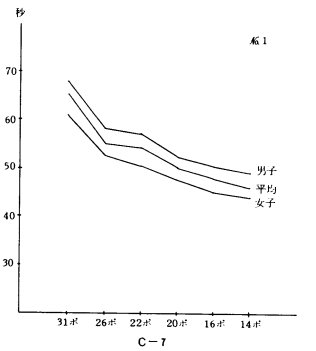
C－3

4 年



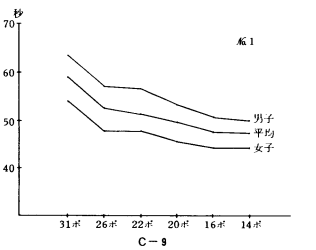
C－5

5 年

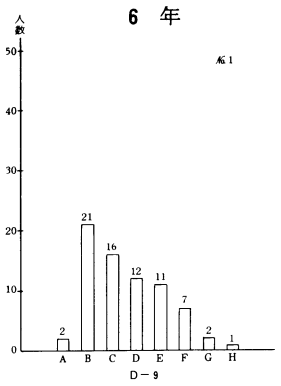


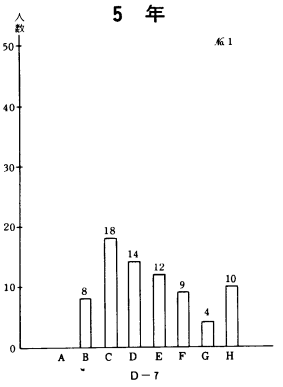
C－7

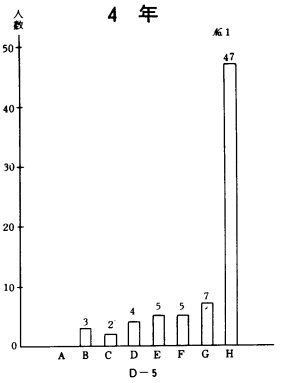
6 年

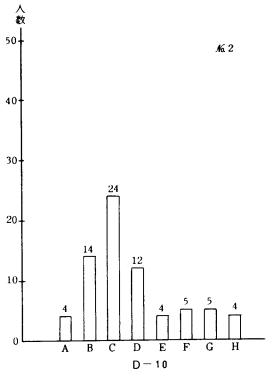


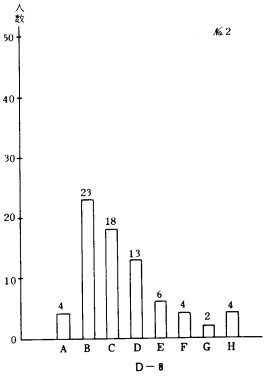
C－9

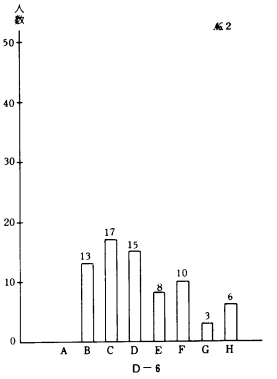












＜各ポイントの平均時間からの考察＞

今回の調査では、学年における最も適した活字の大きさを知ることはできないが、活字の大小にどのような順応、抵抗を示すかは推測することができる。

B－1、B－2のグラフは、各ポイントの学年別平均時間を示したものであるが、大から小へ（No.1）、小から大へ（No.2）のいずれの場合もポイントが進むにつれ所要時間が減少している。これは、調査法の関係から、一回目よりも二回目、二回目よりも三回目の方が手本を記憶すること、手が慣れることなどの理由によるものと思われるので予想されていたことである。また、必ずしも学年毎に上下が並んでいないのも、手本がそれぞれ違うということから、大きく取りあげることにはしない。この項目で注目したいことは、所要時間の推移の仕方

No. 1

	A	B	C	D	E	F	G	H
2年男	0	1	1	6	3	1	7	18
女	0	0	2	9	2	3	0	15
合計	0	1	3	15	5	4	7	33
3年男	0	0	0	0	0	3	5	28
女	0	0	1	1	0	5	3	19
合計	0	0	1	1	0	8	8	47
4年男	0	1	2	1	2	1	3	22
女	0	2	0	3	3	4	4	25
合計	0	3	2	4	5	5	7	47
5年男	0	5	7	7	4	6	3	8
女	0	3	11	7	8	3	1	2
合計	0	8	18	14	12	9	4	10
6年男	1	6	8	4	10	6	1	0
女	1	15	8	8	1	1	1	1
合計	2	21	16	12	11	7	2	1

No. 2

	A	B	C	D	E	F	G	H
2年男	0	0	4	3	2	3	2	21
女	0	2	4	3	4	4	4	8
合計	0	2	8	6	6	7	6	29
3年男	0	0	1	5	5	8	5	12
女	0	1	4	3	8	6	4	3
合計	0	1	5	8	13	14	9	15
4年男	0	5	6	8	3	7	1	1
女	0	8	11	7	5	3	2	5
合計	0	13	17	15	8	10	3	6
5年男	1	12	8	5	4	3	2	4
女	3	11	10	8	2	1	0	0
合計	4	23	18	13	6	4	2	4
6年男	1	6	10	7	3	4	2	3
女	3	8	14	5	1	1	3	1
合計	4	14	24	12	4	5	5	4

E

から見られる学年別の特徴である。そこで、次にそのことについて述べることにする。

○学年別特徴

グラフC－1からC－10までを参照されたい。

C－1、C－2は二年、C－3、C－4は三年、C－5、C－6は四年、C－7、C－8は五年、C－9、C－10は六年の所要時間の推移を表すグラフである。それぞれ、奇数番号は、大から小へ（No.1）、偶数番号は、小から大へ（No.2）の調査結果を表す。

○二年生の特徴

二年生では、31ポから始めた場合と14ポから始めた場合とでは、明らかに違いが見られる。31ポからの方がさすがに入りやすいようであり、書きやすいのであろう。しかし、14ポにそれほど抵抗があるのかというとそうでもないのである。最終的に31ポで終えた時より、14ポの方が時間はかかっていないのである。確かに14ポというのは二年生にとっては細かすぎるのかもしれないが、決して書けない大きさではないのである。低学年には大きな字をというより、むしろもっと自由に大きさを与えてやるべきではないのであろうか。

男子と女子との差が大きいのもこの学年の特徴である。この傾向は、どの学年にもある程度いえることではあるが、三年と共に二年生において特に顕著なのは、低学年では女の子の方が大人であるといわれるゆえんでもあろうか。

○三年生の特徴

三年生は、調査結果からは特徴のとらえにくい学年である。わずかに、二年と比べ、31ポから始めた方が抵抗を示すという点に表れていることと、男女の差に他学年と比べて違いを見るということである。31ポから26ポへの動きに大きな差が見られるが、このことは、「書くこと」に対する男女の差がこの学年では特にあると受け取ってよいのであろうか。また、16ポから14ポへの動きを見ると、男子が抵抗を強くしているが、これはいかに判断すべきであろうか。

○四年生の特徴

今回の調査結果中、四年のグラフの折れ線の動きが最も変化に富んでいる。まず、31ポから始めた場合の抵抗が極めて大きいこと。14ポからの場合と比べて見るといかに抵抗が大きいかがよくわかる。

このことから、四年生にとって、31ポは書きにくい、14ポは書きやすい大きさであるということが明らかなのであろう。ちなみに、四年の教科書は16ポ、14ポ相当の活字が使われている。（「目的」の項参照）このような特徴は、即ち、四年生の児童は、自分に書きやすい字の大きさを持っている、自分の字の大きさが一定になったということが言えるのではないか。31ポから26ポへの動き、26ポから22ポへの動き、あるいは、14ポから16ポへの動き、16ポから20ポへの動きのそれぞれに見られるとまどいが、それを表しているように思われる。

また、前学年に比して男女間の差が減少しているというのも当学年の特徴としておかなければならない。

○五年生の特徴

五年の特徴としてまず明らかな点は、四年生までに比べて所要時間がはるかに少ないということである。「書くこと」に早さを持つことができるようになるというのがこの五年なのであろう。と同時に、C－7、C－8のグラフの折れ線の形が変わらなくなっているというのは、大きさに応じて自由に書くことができるようになっているということなのであろう。四年で自分の書きやすい一定した大きさの字を持ち、五年では大きさに関係なく、必要に応じて自由にしかも早さを伴って書くことができるようになるということができるのではないか。もちろん男女間の差も少ない。

○六年生の特徴

五年で得たものをさらに強化しているのが六年生での特徴である。大きい字から書き始めようが小さい字から書き始めようが、全く大きさにとらわれていないことを、C－9、C－10の折れ線が表している。詳くは、表Aの No.1、No.2の平均時間を対比して見るとよくわかる。六年生にとっては、今回の調査は、一回と二回、二回と三回…と行う反復練習の効果を見ることができるものといってもおかしくはない結果になった。速度の比較はともかく、六年生は、「書くこと」に関しては、大人と同じように、字を自由に操れると言ってよいであろう。

＜ポイント間における所要時間の差の大小について＞

本調査では、14ポから31ポまでの六つの活字の大きさを扱ったわけであるが、この項は、その間の所要時間の最大、最小の差を一人一人について調べ、学年毎に整理した結果について考察を加えようというものである。

整理の仕方については、次のようにした。

（単位は秒。）

A	0 ～ 5
B	6 ～ 10
C	11 ～ 15
D	16 ～ 20
E	21 ～ 25
F	26 ～ 30
G	31 ～ 35
H	36 ～

当然のことながら、Aに位置する児童は、活字の大きさに左右されることなく、大きさに応じて一定の早さで字を書くことができ、Hに位置する児童は、大きさによって

書きやすい、書きにくいがはっきりしている、つまり、字の大きさに左右されるということであり、一定の早さで字を書くことができないということである。

本項では、それらの分布の様子を見ようというものである。

○学年別特徴

グラフD－1、D－2は二年、D－3、D－4は三年、D－5、D－6は四年、D－7、D－8は五年、D－9、D－10は六年の分布の様子を表すものである。奇数番号は、大から小へ（№1）、偶数番号は、小から大へ（№2）についてである。

○二年生の特徴

前項で、二年生が必ずしも細かい字に対して抵抗を示していないという考察を加えたわけであるが、D－1、D－2のグラフからもそれらの裏付けとなるものを見ることができる。

両グラフを見比べると、大同小異、C、Dに位置する児童の数に多少のばらつきがある程度である。仮に、二年生が細かい字に抵抗を示すとするならば、D－2のグラフのH寄りに数が集まるはずなのである。なぜならば、D－2の結果は、14ポから始めた場合（№2）なのであるから、前述のように、手本に対して第一回目というのはかなり時間がかかることもあり、第六回目にきやすいとする31ポなら、その所要時間にはかなり大きな差が表れるはずなのである。

B、C、Dに位置する児童が少なからずいること、D－1、D－2のグラフの型が似ていることなどを考え合わせてみると、二年生の中にも、意外と大きさにとらわれずに、安定した速度で書字を書くことができる児童が現れ始めているということが言えるのではないか。三年、四年のそれぞれのグラフとの対比からもうかがえるのである。

○三年生の特徴

三年の両グラフには、かなりの違いを見ることができる。31ポから始めた場合のポイント間の所要時間に相当な差があるのである。ほとんどの児童が26秒以上の開きを持っている。14ポから始めた場合にはそれほどの開きが見られないということは、C－3、C－4のグラフからも測れるように、二年までとは違い、14ポよりも31ポの方に抵抗を示すという表れと思われる。

C－3、C－4のグラフの第一回目の調査を除き、後の五回でのポイント間の開きを見てみると、その間の開きには、それほどの差が見られない。このことは、31ポには抵抗があるが、早さについては、ある一定の早さでもって字を書くことができるという表れではないであろうか。そのことが、D－4のグラフに表われてきているようである。ポイント間の所要時間の差がそれほど出ていないという点で。

31ポを除いて、後の五つのポイントには大してとらわれず、ある一定の早さで字を書けるようになってきたという段階が、四年生の特徴と言えよう。

○四年生の特徴

三年に続いて四年生においても31ポに対する抵抗は、かなりはっきり見ることができる。それは、D－5のグラフに表れている。

三年までとの相違点は、D－6のグラフに見られる。

20秒以内の差を示す児童が圧倒的に多くなっている。31ポという字の大きさには三年と同じようにかなりの抵抗を示しているが、その他の字の大きさに対しては、それほどのとらわれも見せずに同じように書けているのである。四年の場合には、三年の段階よりさらにその傾向を強化していると言えよう。C－5のグラフで、31ポを除いたポイント間の所要時間の差が、極端に少なくなっていることがそれを物語っているのである。

○五年生の特徴

五年生は、これまでの学年と比べ明らかな相違を見せている。

D－7、D－8のグラフも（つまり、31ポから始めた場合でも、14ポから始めた場合でも）右下がりの結果を表している。このことは、今回の調査で用いた六つのポイントについては、大きさにとらわれることなく、大きさに応じて一定の早さで字が書けることを示していると見てよかろう。

Aに位置する児童が現れたのもこの学年が初めてである。つまり、ポイント間の所要時間の差が5秒以内という児童である。これまでに何度か述べているが、今回の調査の方法として、最初に行った場合と最後の六回目とでは条件的にある程度の差が見られても不思議はないのであるが、それを5秒以内におさめているというのは、驚きと言ってもよいのである。

○六年生の特徴

本項の考察からも、前項と同じように、六年では、五年でそれまでの学年に比べ変化したものをさらに強化している段階であるということが言える。

D－7、D－8のグラフとD－9、D－10のグラフを見るとよくわかるが、グラフの型はほぼ同じである。（B、Cに多少の違いはあるが）傾向は同じであるが、その割合は多少違いがある。即ち、Cに位置する児童の割合が増え、G、Hに位置する児童の割合が減っているのである。字の大きさにとらわれることなく、大きさに応じて一定の早さで字がかけるという五年生での特徴を、さらに強化しているというわけである。

（東京・四谷第六小・教諭）